



神経集中治療におけるモニタリング

－瞳孔からみえてくる評価と可能性－

演者 日本医科大学大学院医学研究科
救急医学分野 講師
横堀 将司 先生

神経集中治療の目的は二次的脳損傷をいかに予防し患者転帰を改善させるかにある。近年、より正確な病態把握のために、臨床所見、血液生化学検査、画像診断、理学所見に各種神経モニタリングを複数組み合わせ評価する、いわゆる "Multimodality monitoring" (MMM) の有用性が強調されている。

従来、聴性脳幹反応検査 (ABR) や脳波検査 (EEG) などは測定や判読に専門的知識を要したが、近年では脳幹反射の一つである瞳孔対光反射を簡便かつ定量的に測定できる Pupillometry が普及しつつある。我々は ABR と Pupillometry のパラメータを比較したが、瞳孔収縮速度が ABR 潜時の延長および患者転帰を予測する指標であることが明らかとなった。Pupillometry と ABR の生理学的近似性から、Pupillometry は ABR の付加的あるいは代用的な、新しい治療・転帰予測モニタリングとなる可能性が考えられる。

本口演では自験例を提示し、複数のモニタリングの利点と欠点を整理しつつ、神経集中治療における瞳孔測定の有効性と可能性について論じたい。